

講演Ⅲ

伝道の担い手

倉沢正則

現代日本の教会¹には、伝道との関連から二つの課題がある。一つは「教職中心主義と信徒の受動性」であり、もう一つは「伝道力の低下」である。米国宣教師 T・ヘイスティングと M・マリNZは、「日本の教会が直面する教会指導者の危機的状況」を表し、日本基督教団の現状を分析している²。その論点の一つとして、「教職中心主義と信徒の受動性」を指摘する。「万人祭司制」を謳うプロテスタント教会であるが、日本基督教団の指導者にはあまり影響を与えていないと。高い教育を求める伝統的な教職や儒教の影響にある階層的な指導者モデルが牧師の権威を強調して信徒の積極的な役割を減じている。ミニストリーは牧師や教職が行うものという理解となり、信徒は何の責任も与えられない。信徒はただ受動的である。この態度と姿勢の変革と教会指導における信徒の動員なくして、日本のプロテスタント教会の将来は甚だ疑問であると手厳しい。日本基督教団の現状分析ではあるが、日本のキリスト教会全般にも通ずるものである。

一方の「伝道力の低下」は、最近の受洗者数の減少傾向の中で語られている。クリスチャンは自分のことで精一杯なのか。教会内部の問題で苦闘しているのか。組織を整えるのに勢力を使い果たしているのか。イベントに力を注ぐが、

¹ ここでは、プロテスタント教会を取り扱う。

² Thomas J. Hastings and Mark R. Mullins, "The Congregational Leadership Crisis Facing the Japanese Church." In *International Bulletin of Missionary Research* Vol.30, No.1, Jan 2006, pp.18-23.

福音を個人的に語り、救霊の情熱をもって、一人一人と関わり、時間を割き、その課題とともに取り組むことが少なくなってしまったのか。人を救いに導く力が弱くなったのか。外に出て行く力、未信者に影響を及ぼす力が衰退しているのか。一教会の受洗者数は平均1人で、受洗者が年間に起こらなかった教会も数多い。教会の伝道力、とりわけ、牧師の伝道力が問われている現状である³。

この二つの課題をどのように乗り越えられるのか。もう一度、主イエスが建てられた「教会」の本質と伝道との関係、教会を構成する人々の役割とその伝道協力を神学的に問わねばならない。

1. 聖霊と伝道の担い手

A 救いの実現者なる聖霊と「聖霊の交わり」としての教会

イエス・キリストによる救いのすべて⁴を人間に有効ならしめるのは聖霊である。キリストの福音を聞いて、それに心を向かわせ、人に罪を自覚させ、悔い改めに導き、キリストへの信仰を喚起させて回心へと導く方は聖霊である(ヨハネ 16:8, I コリント 12:3)。また、罪のゆえに死んでいる人間の本性に新たな霊的誕生(再生)をもたらすのも聖霊である(ヨハネ 3:3, 5-6, テトス 3:5)。クリスチャンをその生活において、キリストと同じかたちにその姿を変え(II コリント 3:18, ガラテヤ 5:22)、他のクリスチャンと一致を保ち(エペソ 4:3)、与えられた賜物を互いに用いてキリストの満ち満ちた身たけにまで達する(エペソ 4:13,15)ようにされるのも聖霊である。そして、道徳的霊的完成(ロマ 8:2)とからだの贖い(ロマ 8:11,23)を達成されるのも、また、御国の相続財産を保証しているのも聖霊である(エペソ 1:13-14)。クリスチャンの生涯の歩みとともに臨在し(ヨハネ 14:16-17)、とりなしをされる(ロマ 8:27)のも聖霊なのである。

聖霊は、イエス・キリストの救いを個人にのみ有効ならしめる方であるばかりでない。死せる干からびた骨と化したイスラエルを生き返らせた(エゼキエ

³ 「現代日本の教会の実情を知る」(クリスチャン新聞ブックレット、2007年)

⁴ 伝統的にオールド・サルティス(再生、義認、聖化、栄化等)と言われている。

ル 37:10-11) 聖霊は、キリストのいのちに与る者(そこにはユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もない)を一つからだ(教会)とされる(I コリント 12:13, ガラテヤ 3:28, エペソ 2:16,22)。一つ御霊を飲む者とされたクリスチャンは、一つ家族、聖なる宮、神の御住まい(エペソ 2:19-22)として結び合わされ、御霊をともに分かち合う交わりを持つ者とされている。教会は「御霊を帯びるからだ⁵」なのであり、「御霊の交わり⁶」(ピリピ 2:1, II コリント 13:13)であると言える。

B 聖霊降臨と教会の誕生

「御霊の交わり」としての教会の誕生は、ペンテコステの日起こった。聖霊の降臨は、キリストの弟子たち個々に新しいいのちが上から与えられるだけでなく、ともに一つ御霊を受け、一つ家族として結び合わされたことを意味する⁷。一つのキリストの教会が形づくられたのである。聖霊こそが教会を生み出し、その一致を教会に与え、キリストとのともなる交わりを教会に味わわせ、彼らに霊的アイデンティティを形成させ、キリストにある共同の関係を強め、互いの必要を補い合う「愛のわざ」へと導き、世に影響を与えるものとした(使 2:44-45)。初代教会の誕生にはこの聖霊の注ぎがあった。また、ユダヤ人と交際しなかった異邦人がキリストにある回心をユダヤ人クリスチャンに確証させたものは聖霊の注ぎであった(使徒 10:45)。キリストの教会がユダヤ人から異邦人へと広がる中で、人がキリストを信じる信仰によって救われ、教会に加えられることを保証し確証させたものも聖霊の臨在であった。まさに、「聖霊がおられるその所に教会は存在する⁸」のである。キリストの教会存在自体が、その性質上、聖霊と不可分であると言わざるを得ない。

⁵ Alan Stibbs, *God's Church: The Bible's Teaching on God's People*. (London: Inter-Versity Press, 1974). p.45.

⁶ Edmond P. Clowney, 'The Biblical Theology of the Church,' in *The Church in the Bible and the World: An International Study*. D. A. Carson ed., (Grand Rapids, MI: Baker Book House, 1987). pp. 58-87. 参照。

⁷ Alan Stibbs, *God's Church*. p. 44.

⁸ *Ibid.* p.47.

C 聖霊と教会の使命なる伝道との関係

キリストの救いを個々人に実現させ、彼らを一つからだとして教会を生み出させた聖霊は、「証しの御霊」(ヨハネ 15:26-27, 使徒 1:8)でもある。言い換えれば、教会の存在自体があらゆる場所や文化の中で、キリストを「証し」つづける存在なのである⁹。また、聖霊は、教会に力を与えてイエス・キリストの証人とさせる。ペンテコステの時に、ペテロは、「十一人とともに立って」はつきりとこの出来事が預言者ヨエルの預言の成就であり、イエスが主でありキリストであることを証言した(使徒 2:14,36)。伝道こそが、新しく生まれた教会の産声であったわけである。聖霊は人をキリストに招き、神の前に義とし、御子の似姿に変えるお方だけではない。聖霊は、第一義的に、神の民である教会を外に押し出し、福音をまだ聞いていない人々のところに向かわせる駆動力なのである¹⁰。聖霊は、クリスチャンの心を満たし、その口を広げ、語るべきことを教えられる(マタイ 10:19-20)。聖霊の第一義的な働きは、人々の口を開き、イエス・キリストを証言させることである。聖霊は、クリスチャンに伝道を動機づけ、福音を聞く必要ある人々へと導き、福音を語らせ、さらには、その証言に聞く人々の心を開かせ、それを受入れさせるのである(使徒 16:6-10,14)。

イエスは復活後、弟子たちに現れて、「平安があなたがたにあるように。父がわたしを遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わします。」と言われて、彼らに「息を吹きかけ」て、「聖霊を受けなさい」と言われた(ヨハネ 20:21-22)。世に派遣された教会(Church in Mission)の姿をここに見ることができるが、その派遣先の広がり、「エルサレムから始まってあらゆる国の人々に」(ルカ 24:47-49)は、聖霊の働きと深く関わっていることを覚える。教会の派遣の主はイエス・キリストであるが、教会に力を与えて、彼らを押し出し、「エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで」(使徒 1:8)向かわせるのは聖霊なのである。まさに教会の駆動力としての聖霊が「使徒の働き」には

⁹ Charles Van Engen, *God's missionary People: Rethinking the Purpose of the Local Church*. (Grand Rapids, MI: Baker Book House, 1991). p.97.

¹⁰ Arthur F. Glasser, *Announcing the Kingdom: The Story of God's Mission in the Bible*. (Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2003). p.263.

顕著に見て取れる。

II. 伝道的教会論

A 『ローザンヌ誓約』にみる教会と伝道

1974年にスイス・ローザンヌで開催された世界伝道会議の結実は、『ローザンヌ誓約』としてまとめられ、これが世界の福音主義諸教会の伝道観を表すものとして受け止められている。その第六項に、伝道と教会の関係を考察して次のように表明している。

私たちは、父なる神が、キリストを遣わされたように、キリストは贖われたご自身の民をこの世界に遣わされることを、また、その派遣は、主の場合と同じように、深いそして多大の犠牲を余儀なくするところの、この世界への浸透を要求するものであることを確認する。私たちは、教會的なゲッターから脱け出て、未信者の社会の中に充滿して行く必要がある。犠牲的奉仕を伴う教会の宣教活動の中で、伝道こそ第一のものである。世界伝道は、全教会が、全世界に、福音の全体をもたらすことを要求する。教会は、神の宇宙大の目的の中心であり、福音伝播のために神が定められた手段である。……教会は制度であるよりも、むしろ神の民の共同体であり、いかなる文化、社会もしくは政治組織、人間のイデオロギーなどと同一視すべきでない¹¹。

ここには、教会の宣教的(派遣)性質と伝道の使命が謳われ、また、教会が「神の民の共同体」と定義されている。この中で、注目すべきものは、「教会は、神の宇宙大の目的の中心であり、福音伝播のために神が定められた手段である。」という言明である。ローザンヌ誓約に採用されたこの教会観は、「世界伝道会議」で発題講演を担当したハワード・スナイダーの「伝道における神の代理人(エージェント)としての教会¹²」から採用された。

¹¹ ジョン・ストット『現代の福音的信仰：ローザンヌ誓約』宇田進訳(オランダキリスト教文庫、1989年)、63頁

¹² Howard A. Snyder, 'The Church As God's Agent in Evangelism,' in *Let the Earth Hear His Voice*. J.D. Douglas ed., (Minneapolis, MN: World Wide Publications, 1975). pp. 327-351.

以下に、スナイダーの論点を要約してみる。この論文の第一部で「教会の聖書的理解」を展開するが、まず、伝統的な教会理解に言及して、「見える教会」と「見えない教会」の区別について、前者は教会の「制度的(institutional)」理解で、そこでは「見える教会」と教会の本質的要素が同一視される。後者は教会の「神秘的(mystical)」理解で、そこでは教会は時空を越えたところに置かれ、「見えない」真の教会とされる。この両方の理解は、「文化」を真に考えていないとスナイダーは指摘する。なぜなら、前者はあまりにも特定の文化と深く結びついているので、文化的に決定づけられた教会のあり様がわからないし、後者は教会が文化の上に漂い、決して限定された時間、空間、歴史と何ら関わらないからである。そこで彼は、この時間、空間、歴史（文化という領域）を真剣に受けとめるような仕方、教会を考える必要を訴える。聖書は、文化のただ中で、異教的退廃やユダヤ的律法主義に晒されながらも、その真実性を維持しようと「闘う教会」を描き出している。

この理解を適切なものとして考えるとともに、教会の聖書的理解を三つにまとめて提示する。第一に、聖書は教会を歴史的一宇宙的な視座から見ている。聖書は教会を神の宇宙大のご目的のまさに中心に置いている。これは、特に、エペソ書などのパウロ書簡にみられ、そこで宇宙大のご目的とは、教会を通してすべてのものをキリストにあって一つに集めること（エペソ 1:10）によって神の栄光を現すことにある。この神のご計画の中心には、イエス・キリストの血によるご自身と人との和解がある。その和解はすべての被造物に伸ばされ、教会は神が意図される宇宙大の和解の地上の代理人なのである（エペソ 3:10）。伝道は、こうして和解の代理人としての教会の役割の中心となり、最も優先されるべきものなのである。その時、神の御国は歴史の中にもたらされ、ご計画は教会を通して遂行される。第二に、聖書は教会を制度的よりもカリスマ的観点から見ている。教会は制度的組織ではなく、カリスマ的有機体であると新約聖書から考察する。教会は神の恵みの結実であり、恵みによって救われ、恵みの様々な賜物の活用によって強められてゆく。御霊の多種多様な賜物は、教会の一致の中の多様性の根拠となる。これは伝道において重要なことであり、新約聖書は伝道を霊的賜物と関係づけている（エペソ 4:11-12）。教会が活性化し成長するためには、制度的よりもカリスマ的モデルを必要とする。第三に、聖

書は教会を神の民の共同体と見ている。「キリストのからだ」「花嫁」「家族」「宮」「ぶどう園」は教会の隠喩であって定義ではない。それは「神の民の共同体」である。ここには、「民」、すなわち、新しい種族・人類としての教会と、「共同体」、あるいは、交わりとしての教会という理解がある。この理解は旧新約聖書に一貫して見られるものである（出エジプト 19:5-6、I ペテロ 2:9）。すべての教会は一つの民である。それは教会の普遍性を強調する。世界のあらゆる所に散らされた神の民である。そこでは、宇宙大的・歴史的視座をもつ。また、教会は交わりの共同体である。教会は地域性をもって互いに共有の生活を分かち、そこでは教会はカリスマ的有機体として見られるのである。

スナイダーは、教会の伝道的な性質を簡潔に聖書から解き明かしている。制度的硬直化の中にあつて、伝道力を失いつつある日本の教会にとって、彼の聖書に見る教会観は、多くの示唆を投げかけている。

B 教会論的宣教学から宣教的教会論へ¹³

近年、教会（特に、地域教会）を宣教学的視点からとらえ、それを内向的・静的なものとしてではなく、世界に使命をもって派遣されている実体として把握しようとしてきた。それはまた、地域教会を「神の民の共同体」としての見方である。スナイダーの理解もこれに符合する。従来、「教会と宣教」の理解では、教会を制度的に理解し、半永久的な施設をもち、専任の教職によって導かれ、制度維持の方向に働き、世からの避難所であると考えられてきた。それに対して宣教は、個人からなる交わりであり、可動的で自己犠牲的な宣教師に導かれ、企業的でリスクも大きく、世に分け入るものと考えられた。多くの教会員にとって「教会と宣教」とは別個のもの（church and mission）として写り、時に相対峙するものと考えられた。

しかし、1930年代からこの相互関連性が強調されるようになり、教会論的宣教学（ecclesiological missiology）が主要な関心事となった。インド・タンバラム（1938年）、ドイツ・ヴィリンゲン（1952年）の国際宣教協議会（International

¹³ 「神の宣教の民：宣教学的教会観」チャールズ・ヴァンエンゲン 倉沢正則抄訳『共立研究』Vol. IV No.1 1998年7月7日参照。